

学びの実感を積み重ねる子ども発見！

小学校「社会科」6年

「歴史のなぜを見付け、資料を手掛かりに納得するまで追究する」姿

単元名 「武士の世の中」 【2/5時】

本時の目標 頼朝の勢力範囲や鎌倉の地形の資料から読み取ったことを基に頼朝が鎌倉に幕府を開いた理由について話し合う活動を通して、頼朝が武士による政治を進めようとしていたと考えることができる。
(社会的な思考・判断・表現)

本時の授業について

本単元は、「鎌倉幕府の始まりについて調べ、武士による政治が始まったことが分かること」という学習指導要領の内容に基づいて構想されています。有藤先生は「天皇や貴族に代わり、武士による政治がどのように始まったのだろう」という、単元を通した学習問題を設定しました。

前時までに子どもは、平清盛による政治について学び、さらに源平の戦いについて、源義経の活躍により源氏が勝利を収めたことを学んでいます。本時後には、元との戦いについて調べる活動を通して、北条時宗が全国の武士を動員して元の攻撃を退けたことを学びます。1時間、1時間の学びが、単元を通した学習問題の解決につながるよう構想しています。

本時は、「頼朝はなぜ鎌倉に幕府を開いたのだろうか」を考えていく授業です。問いを生み出す白地図の活用によって、子どもが動き出しました。そして、学習問題を解決するための資料提示と、段階的に思考するワークシートの活用によって、子どもは自分の考えを持つことができました。さらに、話し合いでの有藤先生の切り返しによって、子どもは考えを深めていきました。そこには、主体的な追究を通して学びの実感を積み重ねる子どもの姿がありました。

問いを生み出す資料、学習問題を解決するための資料を提示するとともに、資料から分かることと考えられることを構造的に整理することで、分かりやすい板書となっています。



単元の導入時に設定した、単元を通した学習問題を毎時間提示することで、子どもは問題意識を持ちながら学びに取り組むことができます。

まとめは「学習問題の解決」として位置付け、子どもの言葉を生かしてまとめています。

問いを生み出す白地図の活用

「なぜ奈良や京都じゃないの？」「なぜ奈良や京都からこんなに離れた所に幕府を開いたの？」子どもが口々に疑問をつぶやきました。

そこには、有藤先生の意図的な仕掛けがありました。まず、今までの学習を振り返りながらこれまでの政治の中心地を地図帳で探します。「大和朝廷は奈良にあったって言われているよね」「聖徳太子の頃も奈良だ」「奈良時代の平城京ももちろん奈良」「平安時代の平安京は京都だ」子どもは奈良と京都が長い間、政治の中心地だったことを再確認しました。

そして、近畿地方から関東地方までを拡大した白地図に奈良・京都と鎌倉を記します。「なんでわざわざ…」「なんでこんな遠くに…」この白地図により、奈良・京都と鎌倉の遠さが強調され、冒頭の子どものつぶやきにつながったのです。

有藤先生は、「源頼朝が鎌倉に幕府を開いた」という情報をただ与えたり、日本地図をそのまま活用したりするだけでは、効果的な学びにつながらないと考えていました。こういった有藤先生の考えに基づく手立てによって問いを持った子どもは、主体的に動き始めました。

鎌倉の方に味方が多かったんじゃないかな。

頼朝の味方がどこにいたか分かる資料はあるかなあ。

鎌倉のよさがあるはず！

地図を見れば、何か分かるかも。

主体的な追究を生むワークシートと切り返し

ワークシートを活用して、子どもは二つの資料について考えていきました。そして、それらの資料を関連付けて、「関東地方に味方が多く、中でも鎌倉は山に囲まれて守りやすいから」と多くの子どもが考えました。

小雪さん「頼朝の勢力図は1183年だよ。1185年に平氏を倒しているから、攻められる心配はないんじゃない？」

正男さん「念には念を入れたってことかな。」

有藤先生「頼朝は、征夷大将軍の役職を朝廷からもらっているんだよ。」

有二さん「それじゃあ、やっぱり京都の方が政治をしやすいんじゃないかな。」

若葉さん「朝廷から役職をもらっているのに京都から離れたってことは、朝廷の影響を受けなくなかったんだよ。」

秀道さん「そうだよ。朝廷から離れて武士の王国を作ったかったんだ。」

有藤先生は日頃から、資料提示やワークシートの工夫、切り返しなど、子どもの主体的な学びを促す手立てを考え、授業を実践しています。こうした日々の積み重ねが、子どもが納得するまで追究する生き生きとした姿につながったのです。

資料から「読み取れること」と「考えられること」を分けて記入することで、どの子どもも資料を根拠にした考えが持てるようにしています。

有藤先生は、前時のノートを見返して疑問を持った子どものつぶやきを取り上げています。

鎌倉の守りやすさに意識が集中してしまっている子どもに、切り返しによって新たな視点を与えています。

頼朝の勢力図 1183年

読み取れること	考えられること
源氏は東の方で勢力が強い。	頼朝に対しては、東の方が味方が居るから、いざというときに字でもあえる。
頼朝の勢力は今の愛知や静岡、関東と強い。	頼朝に幕府をついたと、近くに敵がいからたいへんそう。

鎌倉の地形図

読み取れること	考えられること
平野に接してはいる。	山に囲まれていて、敵に攻められてくつろいでいる。
海に面している。	海に面しているから、他の場所へ物資も送れる。
山と海に接している。	山と海に接しているから、物資も送れる。

学びの実感を積み重ねる子ども発見！

中学校「社会科」2年

「四国新幹線のルート案を検討する活動を通して、地域的特色を多面的・多角的に考察する」姿

単元名 「日本の諸地域 中国・四国地方 ～他地域との結び付き～」【4/5時】
本時の目標 四国新幹線の具体的なルート案について話し合い、その長所と短所を考える活動を通して、他の地域との結び付きの影響を受けながら地域が変容していくことを、多面的・多角的に考えることができる。(社会的な思考・判断・表現)

本時の授業について
 本単元では、自然環境、産業、都市、生活、他地域との結び付きなどの諸条件を相互に関連付けて中国・四国の地域的特色を捉えることができるように、四国新幹線のルート案を検討する活動を行いました。
 第1～3時では、学習の土台となる自然環境・都市・交通・産業の分布や、中国・四国地方の交通網によるつながりなど、地域の基本的な特色を学習しました。
 第4時(本時)では、「四国新幹線を整備するとしたら、どのようなルートにしたらよいだろうか」という学習問題を解決するために、前時までの資料や本時の資料を基に、地形や人口、産業などの視点から多面的に考察したり、利用者や沿線に住む人々などの立場から多角的に考察したりしました。
 第5時では、他地域との結び付きを中心に考察した中国・四国地方の地域的特色を、白地図にまとめました。単元を通して学んできたことを関連付けて、子ども一人一人が整理し、中国・四国地方の地域的特色を表現しました。

- 四国新幹線を整備するとしたら、どのようなルートにしたらよいだろうか? -

春子さん

①四国は海沿いに大きな町が多いから、それらの都市を結べば、観光や買い物が便利になるよ。

夏樹さん

②そうだね。松山や高松などの都市が結ばれば、働く人も利用できるよね。本州とも、つなげたいな。

観光客や買い物客の立場から考えた春子さんのルート案に、夏樹さんが働く人の立場から根拠を加えました。

秋菜さん

③でも、環境への影響を考えると、開発区間はできるだけ短くしたいから、内陸部の最短距離を通す方がいいと思うな。


春子さんや夏樹さんのルート案に対し、秋菜さんが環境面からの意見を述べました。

夏樹さん


④なぜ、内陸を通すと環境への影響が少ないの？山を崩すから、環境への影響は大きいのでは？

秋菜さんの発言をきっかけに、環境面を考慮するとどのようなルートがよいか、地形面と関連付けてグループで考え始めました。

子どもが、考えたくなる、関わりたくなるようにするための工夫
(1) 地域の基本的な特色を理解するための作業的な学習(前時まで)
 上山先生は、単元の導入時に、地図帳から中国・四国地方の自然環境・都市・交通・産業などの分布をトレーシングペーパーに写し取り、重ね合わせる活動を取り入れました。そうすることで、子どもは、それぞれの分布の特色に気づき、相互に関連付けて理解を深めていきました。ここで学習したこの地域の基本的な特色が、本時に個人でルート案を考える際の手掛かりや小グループで話し合う際の材料になりました。



二つのペーパーを重ねると、産業の発達している地区と都市の分布が重なっていることが分かるよ。相互に関連しているのだな。



(2) 興味や疑問を引き出す資料提示と、子どもの興味や疑問を基にした課題設定
 上山先生は、本時の導入で、北陸新幹線が開通して賑わう駅の様子の写真を提示しました。次に、全国の新幹線整備計画図を提示しました。子どもは、本州、北海道、九州に新幹線が整備されている中で四国にだけ新幹線がないことを知り、なぜ四国に新幹線が通っていないのかと疑問を持ちました。そんな子どもに、上山先生は、「四国新幹線のルート提案書をつくろう」という課題を投げ掛けました。子どもは自分の思い付いたルートをロケにつぶやきますが、それぞれの考えるルートが違うため、自然に子ども同士で自分が思い付いたルートとその理由を話し合い始めました。
 そこで、上山先生は、「四国新幹線を整備するとしたら、どのようなルートにしたらよいだろうか」という学習問題として子どもの問題意識を焦点化し、個人で考える時間を設定しました。子どもは、前時までに学習した自然環境・都市・交通・産業などの分布や本州四国連絡橋の開通による影響を基にして、ルート提案書を作成し始めました。

社会的事象の意義をより多面的・多角的に考察するための工夫
(1) よりよいルートにするための小グループでの話し合い
 それぞれのルート提案書ができると、上山先生は小グループでグループ案を考える時間を設定しました。自分とは異なる考えに出会うことで、子どもは、「でも・・・」「なぜ？」と立ち止まり、資料や地図で一つ一つの理由を確かめ合いながら意見を交わしていきました。
(2) 社会的事象の意義をもう一度見直す場の設定
 各グループ案がまとまったところで、上山先生はそれぞれの案を紹介する時間を設けました。その際、それぞれの子どもの、各グループ案のメリットとデメリットを付箋紙に記入するようにしました。その後、自分の考えるルート案とその理由を書く時間をもう一度設けました。
 これらの活動により、子どもは、自他のグループの考えを比較・関連付け・総合して整理し、「地域の交通網の整備がどのような面で影響を与え、地域が変容していくのか」について、改めて考えを深めていきました。
 上山先生は本時の最後に、学習の始めと終わりに書いたルート提案書を比べる時間をとりました。このことにより、子どもたちは、より多面的・多角的に考察することのよさを実感することができました。

【このルート案にした理由】
 人口の多い都市を結ぶだけ短い距離で結ぶことにより、人や物が行き来しやすくなる。また、沿線の町や村にも利便性がある。沿線には、観光客や買い物客も来る。沿線には、観光客や買い物客も来る。沿線には、観光客や買い物客も来る。

【このルート案にした理由】
 人口の少ない町を結ぶのは同じ。でも、四国には人口が少ない町もたくさんある。沿線には、観光客や買い物客も来る。沿線には、観光客や買い物客も来る。沿線には、観光客や買い物客も来る。

→ 秋菜さんの考えの深まり